

加藤辨三郎 述

# 歎異抄

15

文責 本誌編集部



自力を捨てて

前号につづいて、第五章の後半をもうしあげます。

人によって長い短いがありますが、とにかく生きとし生けるものはみな、いま仮に受けたこの一生の生を終える。すると、その終ったところは悟りの世界、一如平等の法界であります。それは、本願を信じ念佛もうす瞬間において、信心が定まり、その世界へ往くのです。念佛を称えるのは、わが力で励む善ではありません。自分の自力で手柄にするような念佛ではないのです。念佛というものは、如来の御

力、御働きののです。

しかし、凡夫はとかく自力の念佛をやり、これにこだわっていくのです。親鸞聖人も、わたしはそうだったとは書いていません。けれども三願転入という有名な表白があります。そのなかに、自力を捨てていそぎ浄土のさとりをひらくと書かれています。ここでは「いそぎ」といわず「すみやかに」という言葉になっていますが、これは『教行信証』にはつきり書いてあるのです。

親孝行をやらなくてはならないというので、親孝行のこ

とも考えてみました。追福追善をも営みなさいというから、追福追善も行ないました。戒を守らなくてはならないというから戒律を守りました。あるいは念佛三昧もやらなくてはならないということで、一生懸命に称えてみました。そして、そのほかいろいろと諸善万行をやりました。けれども自分は、及第に達することができませんでした。そうしているうちに、自然にただ念佛だとわかって貰い、念佛一筋の世界へ入れていただきました。

しかし、やがてのほどに、まだこれは自力の念佛だということに気がつきました。一心不乱にわき眼も振らず、専念専行で、だれが何といても、これだと力んでつとめたが、これは自力の念佛であつたのです。自力の念佛とは、本願を信じ切っていない証拠です。本願は無限の力であります。お念佛を一遍称えただけでは駄目だ、一万遍称えただけからよろしいといったような本願ではないのです。大事なのは、念佛を称えるか、称えないかであります。南無阿弥陀佛と称えることこそ、本願を信じ念佛もうすことです。その一念が、すでに本願の約束の世界へと入らせてくださるのです。これは本願力のしからしめるところです。一万遍称えなくてはならないとか、三百遍称えただけでは駄目

だといったようなはからいは、一切廃って、ただ念佛となつてきたのです。そのとき、すみやかに悟りの世界へ入れていただきました。まことにありがたいことです、というのが三願転入の告白のお心持ちで、「果遂の誓いゆえあるかな」と結んでいるのであります。

#### 最高の暮らし

「いそぎ」とは、決して死んでしまえということではありません。一刻も早く、待ったなしに本願を信じ念佛もうせ、すると必ず臨終一念の夕べに悟りを開くようにして貰える。それは臨終一念の夕べに、この世とは今生限りになつて、迷いの世界はそこで終ります。六道・四生の間をうねうねし、また輪廻することもありません。

そこで六道・四生、すなわち六道は、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天です。それから四生は、卵から生まれる卵生、体で生まれる胎生、湿めっぽいところから生まれる湿生、そして、ふっと生まれる化生の四つです。「六道、四生のあいだ」、要するに、さまざまの生まれ方があつても、生まれた以上は、みな苦勞をするのであるということです。その苦勞も、本願を信じ念佛を称えることによって、一遍に解消し、そこから解脱していくのです。

それでもなおかつメソメソしているのは、煩惱のなせる業であって、その煩惱も、臨終一念の夕べに立ち消えてしまいます。すると、迷いの世界は、それで終わってしまいます。後は悟りの世界、二度と化けて出るとか、迷いの世界へ戻るとかいうことはないのです。それを信じて暮らしていく。この暮らし方が現世において最高であると信じています。

そこで「神通方便をもて」、すなわち神通方便は、六神通ともうし、人の心がわかるとか、人の前世がわかるとか、自分の先の世もわかる等々のことが説かれています。要するところ非常に深い智慧、つまりこれは如来の無限の御智慧で、われわれ凡夫の智慧ではありません。如来の御智慧は無限であって、届かないところはない、しかもそれが瞬間に届くといわれるのです。これを当時は神通方便という言葉で表現されていたのです。

その御智慧に出会えば、われわれを悟らせてくださるのだ、こう受け取ってもよろしいでしょう。とにかく、これは如来の御力であって、こちらの力ではありません。その如来の御力によって、初めて、気の毒な人、迷っている人を救うことができる。そのときは、まず縁のある者からお

助けすることができるといわれているのです。

この世で、あの人はかわいそうだ、気の毒だと思って、ただ同情しただけでは救われるものではありません。本当の救いは如来にして初めて可能であります。ですから早く、如来の御力にすぎりなさい。親鸞聖人も、自身、如来の御力にすぎる身にしていたのだ、ゆえに安心して暮らすことができるのです。だから、あなた方も、どうぞ早く本願を信じお念佛をもうしてください、私には、それ以上のことはできません、といった心境でしょう。ですから、あくまでも如来の御力を信じ、如来の御力にすぎる。それが他力本願の思想なのです。

気の毒な人がいるから救おうといっても、こちらの力で救うということは、実際不可能です。病氣一つだって、簡単にいくものではありません。中山恒明先生という癌の手術で世界的に有名な方がいられます。その先生もおっしゃっていられます。私が癌を治したのだという医者がいるが、とんでもない間違いであります。私は、私の力で癌を治したことは、一度もありません。治ったのは、みんなあちらさんの力で、本来、治るべき方であったのを、私はお手伝いしただけです、と。これはすばらしいことだと思

ます。名医になればなるほど、ちゃんと治るべくして治ったんだとおっしゃるに違いありません。悟りもそうで、あれは迷ってばかりいるから、わしがひとつ活を入れて悟らせてやろうとやっても、恐らくは反発を受けるぐらいで、とても悟りに到達させることはできないでしょう。

### 正しい教え

こういう意味のことを、第五章で親鸞聖人はおおせになつたのではあるまいかと思いますが、何分にも微妙なところになると、もつと深いことをおっしゃっているのかも知れません。その辺は、極端に言えば、親鸞聖人にお尋ねしないとわからないといわざるを得ないのです。

しかし、お互いに早く念佛の道に入ってくださいといいたいのです。私は五十で念佛の道に入らせていただいたのですが、あまりにも遅かったのです。もつと早くお念佛と出会つていれば、どんなにこっちの心が広く、ありがたいと思う生活が長く続いたかと、なんとももつたないことをしたと、切に思っています。それでも五十で念佛に入らせていただいで、それからもう三十何年経っています。現在は、本当に如来のおほしめしのままという気持ち自然に出てまいります。

妙好人の方がたは、生死を超えたとか難しいことはいっていませんが、事実においては超えていられます。その心境が、生きてよし死んでよし、みんなありがたいのです。死は死でありがたい、生は生でありがたい。生かさせていだいていられることもありがたいのです。これが念佛の偉大な功德であると思うのです。

『大無量寿経』で、釈尊がお弟子さんたちに向かつて、世のなかの人は、どうでもいいようなことに浮身をついやして、自分は何んだという最も大事なことを考えるのを忘れてしまっている、そして、もうかった、損をした、いや家が買えた、家が焼けたといって、とかく泣いたり悲しんだり、笑ったりしている、なんとあわれなことであろう、しかし佛弟子たちは、そんなことに捉われず、悟りを開く、つまり真理を見定めなくてはなりませんよ、とおおせになつていられます。

実際、私たちの考えたり行ったりしていることは、とかく如来の教えに背いているのです。それは末那識のせいでしょう。これは他人さまはどうでもいい、自分だけがというふう到我が先に立つて行動するのです。これをチェックするのが阿頼耶識です。阿頼耶識とは、遺伝情報、遺伝暗

号で組み合わせます。A C G Tの四文字が基本で組み合う、これには規則があって、Aは必ずTとしか結びつきません。CはGとしか結びつきません。そういう大原則のもとに、それがいろいろな組み合わせをつくっていきます。基本の四文字ですが、無限の可能性が出てくるのです。とりあえず六十四通りができ、それがおのおのまた組み合わせさせて、無限というが大変複雑なものができあがるのです。

ついでながら、業というものの働きも、大変に深く広いものです。佛教で宿業といいますが、今日の人は、あれは佛教思想だといってふりむきもしませんが、宿業は単に佛教思想ではなく、厳たる事実であります。それを何より証明するのが、DNA、遺伝情報なのです。遺伝子によって、はっきり私たちは宿業をつきつけられているのです。この業は大変深いものであって、宇宙開闢以来、私たちの命が発生したときから、業を積み重ねています。そして、遺伝子がだんだん複雑になってきています。それは欲の業が働くからでありましょう。一つの単細胞が、せめて二つつながりたいというように欲を起こしたのでしょう。そして二つが三つになり、三つが四つになって、だんだん欲が深くなり、今日の私たちは欲望の権化となっているのです。西鶴

は人間は欲に手足が生えたものだといっていました。本当にその通りだと思えます。遺伝の法則がはっきりそれを物語っています。このように生命科学が発達すればするほど、佛教が、いかに深い教えであり、正しい教えであるかということがはっきりしてくるのです。

人間は、生まれてから後に、たくさんものを仕入れて蔵たくわうことができます。これが人間の特徴といえは特徴です。実際ほかの動物とくらべると、生まれたての人間は、まことに不完全です。ほかの動物は、生まれるとすぐに自分で立ち上がったりします。自分で乳も探して飲みます。ところが人間は、母親が抱いて、おっぱいをくわえさせないと吸えないのです。それが学習して偉い人間になる。同時に非常に記憶に残る。その記憶に残った分が子孫に伝わっていくのです。現在は、科学的に推定の域ですが、これもはっきり出てくる時代がありましょう。しかしそういうことはすでに佛教では阿頼耶識で説いているのです。

佛教は本当に人間を人間にするものです。しかし大事なものは、佛の教えをあくまでも信じることです。それは向こうから与えられて信じさせてくださるのです。

(協和醸酵工業元社長、在家佛教協会前理事長)